追悼演説のポリティクス ー共和政ローマの政治文化と記憶

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>米本 雅一</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>文化学年報</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>□□□</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>□□□</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2018年</td>
</tr>
<tr>
<td>権利</td>
<td>同志社大学文化学会</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.14988/00027596">http://doi.org/10.14988/00027596</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
追悼演説のポリティクス ー共和政ローマの政治文化と記憶

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>米本 雅一</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>文化学年報</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>3</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>133-158</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2018-03-15</td>
</tr>
<tr>
<td>権利</td>
<td>同志社大学文化学会</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.14988/00027596">http://doi.org/10.14988/00027596</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
追悼演説のポリテイクス

米本 雅一

古代ローマの追悼演説 Laudatio Funeris あるいは葬送儀礼を論じる際、必ず言及される史料のひとつがポリュビオスの記述である。彼はローマの「よく知られた人物」の葬送儀礼の場面を以下のように描写している。

「よく知られた人物が亡くなった場合、葬送の礼を執り行い、彼を葬しているような姿勢で支えられるが、まるで横たえられることもある。それから、それを民衆が取り巻く、もし故人が成人した息子を残しているなら、息子が、もしいないのであれば、親族のうちの誰か、演壇へとあがり、故人の美徳と生前に成し得た業績について演説する。そこに居合わせることで、これらの業績に関与した人だけではなく、関与していなかった人も含め、人びとは成し遂げられたことを思い出し、その光景を目に浮かべることで、共感を抱き、その喪失は親族に限らず、市民全体に共有する」
追悼演説のポリテクス

『中略』

もそのなる。

さらに、演説者は理葬される人物について語り終えると、そこには「肖像として、居並ぶ他的先祖たちについて古

い時代から始め、それぞれの成功と業績を語る。これによって偉大な人物の善行は絶えず更新され、偉業を成し

遂げた人びとの名声は永遠のものとなる。また、祖国に貢献した人びとの名声は多くの人びとに知られるところ

となり、後世に語り継がれる。しかし、最も重要なことは、若者たちが偉大な人びとに与えられる栄誉を獲得す

る希望を持つことで、共同体の繁栄のためにあらゆることに耐えるように促されることである。（1）（2）内は引

用者による補足。

ポリュビオスは葬送儀礼を通じて故人の親族だけではなく、その場に居合わせたローマの民衆たちもまた故人の記憶

を共有することを指摘している。そして、このポリュビオスの葬送儀礼の描写の中心に位置づけられているのが追悼

演説である。

従来、追悼演説に関する研究は大きく分けて、追悼演説自体に関心を向け、その内容やトリックの分析に焦点を

当てている研究と（2）、共和政の政治文化を理解するための分析対象として葬送儀礼や追悼演説を扱っている研究とに

分類できる。（1）前者にも触れられていないわけではないが、後者により顕著な傾向は政治エリートによる支配を支え

る要素として、葬送儀礼・追悼演説を扱う研究が増加している。この変化は、いわば共和政の政治史研究の「文化

治文化としての葬送儀礼・追悼演説を扱っている研究」というとの、いわば、共和政の政治史研究の「文化

論的転回」とも言えるもので、それまでの人的結合関係から政治を理解するというアプローチから、政治と民衆をつ
追悼演説のポリテクス

彼は、従来の研究が追悼演説のレトリックを均質なものとしてとらえ、その変化に注目してこなかった点を批
判する。彼の研究は、包括的に追悼演説を扱いつつも、あるいは、包括的であるがゆえ、個々の事例、政治的・社
会的文脈についてあまり述べておらず、共和政の事例についてもかなり紙幅が割かれているもの。その政治的意
義についてはほとんど言及されていない。

以上の様々な状況から追悼演説への関心のあり方が変化したのは、一九九〇年代以降の政治史研究の文脈なかで葬
送儀礼が言及されるようになったためである。その動向のなかで、追悼演説はキールドルフ以前の研究者ほどど
注目してこなかったその社会的文脈、特に政治エリートの支配を支えていた政治文化と関連づけて論じられるように
なり、追悼演説を含む葬送儀礼は政治エリートによって提供されるスペクタクルのひとつとして、彼らの支配を支え
るメディアとして認識されるようになった。

政治エリートと彼らのイデオロギーの問題について多くの業績を残しているH・I・フラワーは、その代表的な研
究である政治エリートの葬送儀礼、特にマススクに関する研究のなかで追悼演説についても扱っ
ている。(8) 彼女は、追悼演説をそこで語られる故人や先祖の業績をとおして、彼らの家系の正統性と優位性を提示
するものであると評価している。このような評価は共和政の儀礼と政治の関係を論じているE・S・フレイクやより明確
なるものであると評価している。

これらの研究と基本的理解は変わらないものの、異なる視点から追悼演説について論じているものとして
ヨハンソンの研究がある。(9) 彼は葬送儀礼の場面をコンピューター・グラフィックによって3D画像として視覚化
する。
追悼演説のポリティクス

II
政治エリアトにとっての追悼演説

追悼演説の検討に入る前題としてここにたったまでの政治エリアトの葬送儀式の流れを確認しておきたい。有力家系に属する人物が死ぬと遺体の身支度がほどこされ、故人の家の人とのトリウムにおいて遺体が公開され、親族・友人、クリエイティブの頃を受ける。一定期間が過ぎた後、家からフォルムまでの葬送行列Pompa funebraが執行され、フォルムの演壇に到着した後、追悼演説が行われる。

ポリュビオスは先にあげた引用箇所で、フォルムにおいて追悼演説を聴くのは故人の親族・友人のみならず、そこに居合わせた「市民全体」も含まれていると述べていた。この記述が示すように、有力家系の葬儀は単に親族のみのプライベートな行事ではなく、ローマ市民に共有されるバブルな側面を持つものであった。なかでも追悼演説は政治エリアトにとっての栄誉であり、然るべき功績をあげた人々にとらえなされるべきものであるという認識がなされていた。しかしながら、数例ではあるが女性に対する追悼
演説の事例が確認できることから、追悼演説が行われる対象となるのは必ずしも公職に就いていた人物に限定されるものではないことがわかる。共和政期における女性に対する追悼演説として、前六九年的C・ユリウス・カエサルによる叔母ユリアに対するものがよく知られているが、他の例のように男性に対する追悼演説がなされたことが知られてい

アントニウスは応えた、そのとおりだ。確かに、このジャンル（称賛演説）において、君『カトゥルス』によ

って、君の母であるポビリアが称賛されたとき、彼女はわれわれの国において、このような崇拝を与えられた初

めの女性であると思うのだが、私自身、そして、その場にいたすべての人びとが、大変魅了されたことを私は

知っている。しかし、わたしどは、われわれが語ることすべてが、知識や規則に連関づけなければなら

ようには思われない。[[136]](注)（一）内は引用者による補足。

キケロは対話者のひとりとして設定しているカトゥルスに対して、アントニウスが応えるというかたちで、ポビリア

の追悼演説について高く評価している。しかし、それに続き、演説はすべて『知識や規則に関連づけなければなら

ない』わけではないとすると。ここでの議論は修辞学の対象とはならないのではないかと述べているのである。

このようなキケロの追悼演説に対する（少なくとも修辞学に関する部分での）否定的な評価は以下の箇所にもみら

れる。
追悼演説のポリティクス

なぜなら、そのような基礎知識を望まなくとも、語ることのあらゆる規則が得られる同じ源泉から、称賛演説をadagionesに飾りつけることとはできるのであり、教わらないと、人の称賛すべきことをわからない者がいるだろうか。実際、クラッスが、同僚のケンソルに対して行なったあの演説のなかで、初めに言った、『自然や運命から人間に与えられたものによって打ち負かされるならば、平常心を保つことはできる。人間自身が自然のために用意することができるものによって打ち負かされるならば、耐えることができない』という言葉に引くならば、誰かを称賛しようとする者は、運命による書きものについて語らねばならないことを理解するだろう。

我々の称賛演説adagionesは、広場で行われ、称賛される人物への簡潔で、装飾も、飾り気もない証言のようや、それを書かなければならないのである。しかし、そうであるにもかかわらず、時折、我々もまた称賛演説を行わなければならない。また、伯父のアフリカヌスの『追悼』称賛演説をしようとするQ・トゥベロのために称賛演説を書いたC・ラエリウスのように、あるいは我々自身がギリシア人のように、我々が誰かを称賛したいたと思ったとき、それでもいうこともない。この二つの中ではキケロは、追悼演説を含めた称賛演説は語られるべきことは自明であり、『簡潔で、装飾も、飾り気もない』表現が求められているため、修辞学を論じるうえでは適していないとされている。
の評価は、冒頭で取り上げたポリュビオスの記述の手放しの贔屓トでは多少の隔たりがある。このことを考えると、
で考慮しておかなけばならない点がある。それは、キケロが追悼演説に対し否定的な評価を下しているのよ、
つは修辞学のテクニックという観点からであり、あまりに論われるべきことが明白であるため、修辞学を論じる上
はその対象ならないということである。もうひとつの批判点は、家系者の者が操作する可能性があるため過去の記
録としては価値がないということである。したがって、追悼演説を行うことそれ自体について否定的な見解を述べ
ているわけではないのであり、自ら追悼演説の草案を書いていることやファビウス・マクシムスの追悼演説を称賛し
ていることは、キケロにとっては矛盾するものではなかったと言えよう。

一方、ポリュビオスの記述は葬送儀礼の一連の流れのなかで追悼演説が行われている場面を描写しており、追悼演
説のパフォーマンスに目を向けている。研究者たちは葬送行列からの一連の流れ、居並び先祖たちの肖像の
といった視覚的な要素を含めた、スペクタクルとして提供される儀礼のなかで、追悼演説は理解されるものであると
主張する。そうした象徴的、視覚的な要素を踏まえたうえで、政治エリートによる記憶の構築が遂行され、彼らの
権威が示されると考えられている。キケロの追悼演説に対する否定的な評価は演説のレトリックと記録としての評価で
いうのが、演説者の視点のままでが含まれており、そのことが両者の叙述に差異をつくり出している。

では、追悼演説を聴いていた人びとはどのような存在であったのか。聴衆たちにとって追悼演説は政治エリートに
とって提供される記憶を受け取るだけのものだったのだろうか。以下では、断片的なながらも、追悼演説の内容がある
程度わたる事例を例にあげ、追悼演説の内容自体、またそれを取り巻く状況、特に聴衆との関係についての考察を進
めていきたい。
三 残存する共和政中期のふたつの追悼演説

追悼演説に関する史料は演説そのものを完全な形で伝えているものは現存していない。その内容は後世の著作家によって断片的に引用されたものに限定される。このように史料が実際に行われた追悼演説の内容を厳密に伝えているかについては疑問の余地がある。史料のなかで言及される追悼演説の内容を実際に行われた追悼演説のテキストに反映されたと考えられる状況がある。その状況というのでは、共和政期の追悼演説のうち、後世の史料のなかでその内容について具体的な言及がある事例は、前一二七年のL・カエリウス・メテッルスに対する演説、前一二九年のP・コルネリウス・スキピオ・アエリアイヌスに対する演説、前一九年的C・ユリウス・カエサルの叔母に対する演説の四つである。ここでは、共和政中期の二つの事例を検討する。

ひとつめは、前一二一年に行われたL・カエリウス・メテッルスへの追悼演説である。この演説は息子クィントゥスによって行われたとされる。間接的ではあるが具体的な内容について知りうる追悼演説の最古の事例で、紀元後一世紀の著作家プリニウスの『博物誌』のなかで言及されている。
supremis laudibus
追悼演説のポリテイクス — 144 —

継がれる表象の提示、継承の場であったこともうかがえる。この事例が示すのは、追悼演説をとおして政治家は自らの徳と家系の連続性を提示し、また、ポリュビオスの言葉を信じるならば、追悼演説を聴いている人物とそれらを共有したということである。

もうひとつ、前一二九年甥のQ・ファビウス・マクシムスによってなされた、P・コルネリウス・スキピオ・アエリヌス（末期）に対する追悼演説である。この演説の内容の詳細は、キケロの『ミロ弁護』についての中世（七世紀）の注釈書（ポピオの注釈書）に言及されているもので、演説の草稿を書いたとするC・ラエリウスのテクストがその当時まで残っており、その演説の最後の部分を引用したものだとされている。

不死なる神々に対する感謝が決して十分であることをはならないように、それはどの精神と才能を備えた人物がとりわけこの街に産まれ、このような死をもたえたこと、生前、あなた方にとっても国の人々を願うすべての人にとって、最も必要な人がこの世から消えてしまったことのせつしさを十分に表現することはできない、市民諸君よQuintus — 86。}

キケロはこの演説に関して、以下のように述べている。
彼「スキビオ」の葬儀の日に、マクシミウスは追悼演説を行なう。マクシミウスは、あのような人物が他ならぬこの場に生まれたことを不死の神々に感謝を述べた。なぜならば、彼がいる場所が、必然的に世界の命令権を
在する場所であったからだ。

ここでの表現は先に引用した「ポッピオの注釈書」と完全に一致をはしていないが、演説の趣旨が大きく外れている。

Skibiioの追悼演説は、ラエリウスによって書かれたことを前提としている。先述したように、「ポッピオの注釈書」においても小スキビオの追悼演説はラエリウスによって書かれたことを前提としている。

C・ラエリウスが演説の草稿を書いているという記述である。先述したように、「ポッピオの注釈書」においても小スキビオの追悼演説はラエリウスによって書かれたことを前提としている。

ラエリウスの追悼演説は小スキビオの別名である。ラエリウスは、演説者が小スキビオの別の別名である。ラエリウスは、演説者によって語られる場合が多くなかったにせよ、その演説の内容は他の演説の内容は他の者、特に弁論家としての評価の高い人物によって作成される場合があるからである。キケロ自身が依頼を受け、追悼演説の草稿を作成したことはすでに述べたろう。

このような追悼演説の草稿の依頼があるという点と、政治エリートにとって、葬送儀礼、とりわけ追悼演説は単に死者への哀悼を示す行為ではない。故人の栄誉・業績を称揚するのみならず、その家系にとっても威光を顕示し、以後の政治的影響力を保つための重要な手段であり、広範な聴衆の存在を意識していたことがうかがえる。

政治エリートにとって、葬送儀礼、とりわけ追悼演説は単に死者への哀悼を示す行為ではない。故人の栄誉・業績を称揚するのみならず、その家系にとっても威光を顕示し、以後の政治的影響力を保つための重要な手段であり、広範な聴衆の存在を意識していたことがうかがえる。

ラエリウスの追悼演説が示しているように、そのなかで政治エリートの価値観が提示され、自己演出が行われる。
追悼演説のボリティクス

追悼演説における聴衆の問題を考えるために、理解の補助的とした共和政の政治文化における記憶の管理の問題について触れておきたい。フラワーは、ローマにおける記憶の問題、とりわけ忘却についての研究のなかで記憶をコン
トロールしようとする共和政期の政治エリートたちの姿を描いている。

フラワーによれば、共和政の初期から中期に

転移記憶を墓碑の編集、葬送儀式など通して親族内で管理されるものであった。しかしながら、C・センブロニウ

ス・グラックスは死後、仲間にに対する死後の措置以降、そのような記憶の管理のあり方に変化が生じたと指摘する。

C・センブロニウス・グラックスは死後、仲間にに対する死後の措置以降、そのような記憶の管理のあり方に変化が生じたと指摘する。

管理が行われたものであると指摘する。

しかしながら、元老院の意図したものにグラックスの記憶が抺消されたわけではないことをプルタルコスが伝えて
一民衆は、グラックス兄弟が窮地に襲われていたとき、卑下し、萎縮していたが、その後直後にどれほど彼らを思う

彼らが殺害された場所を神聖化し、そこにあらゆる季節の収穫物を供えた。そればかりか、あたかも神々の祭壇
に訪れているかのように、多くの人びとが毎日犠牲を捧げ、彼らの像の前でひざまずいた。

このブルタルコスの記述が示しているのは、政治エリートによって管理下に置かれた記憶への操作（ガイウスの記憶
の抹消に対して、それとは関係なくグラックス兄弟の記憶の継承が民衆たちのなかでなされ、オルタナティブな記
憶として蓄積されていたということである。

C・グラックスの事例に登場するような状況が生じることへの対策として、徹底的な記憶の制御措置がとられる
ようになる。例えば、前元三、一〇〇年の護民官L・アプレイウス・サーツルニヌスに対する元号のうち、彼は民衆を煽動するという事実、公敵宣言をされ、その後殺害されているが、彼に対する死後の措置として
財産没収、家への破壊、法の無効といったC・グラックスの場合にも見られる措置に加え、サーツルニヌスの肖像の所
有が禁止されている。これはグラックス兄弟の場合のよる、オルタナティブな記憶を脅かすための措置を考えられ
る。こうした記憶に対する制裁がより苛烈に行われたのが前八二一七九年のディクタト
ル、L・コルネリウス・スッラによる敵対者の記憶の抹消である。

フラーヴァは、スッラによって記憶の制御に関する
しかし、先にみたグリック兄弟の事例のように、国家による管理から逸脱する記憶が残存する可能性は常に存在する。前六九年にC・ユリウス・カエサルによって行われた二つの追悼演説がそのことを示している。

彼がクアエストルの時、亡くなった叔母ユリアと妻コルネリ娅に対して、慣習に従い、演壇から称賛演説を行った。そして、叔母の称賛演説のなかで、彼女と彼の父方と母方両方の起源について語った。私の叔母ユリアの母方の家系は王を起源とし、父方は不死なる神々に連なる。というのも、彼女の母方の名前であったマルキウス・レクス家はアンクス・マルキウス王によって創設された。また父方のユリウス氏は女神ウェヌスから始まり、それが我々の家系である。したがって、その血統には、人間のなかでは最も力を持つ王の不可侵性と、王たちの力のなかに服属する神々の神聖さが存在する。スエトニウスが記しているように、カエサルはこの年、二人の女性、叔母ユリアと妻コルネリ娅に対する追悼演説を称賛演説を行うと同時に、葬列にマリウスの像をあえて持ち出したときだ。それは、スッラの統治以来、そのと

この二つの追悼演説について、ブルタルコスも記しているが、彼はスエトニウスが述べていない情報について言及している。
ユリアの追悼演説に関しては、カエサルが「葬儀にモリアスの像をあえて持ち出した」ことが記され、「この行為が彼を憎しむ大衆の心を捉える助けとなり、彼は優しく情に厚い人物として愛される」とある。

カエサルの追悼演説において、カエサルが「カエサルの栄誉を窃む」という行為を批 判した人びとに対して、「大衆は彼方に激しく大声を浴びせ、喝采でカエサルを迎え、まるで ハデスから久しぶりにモリアスの栄誉を街のなかに取り戻したかのよう」に彼を称賛した。

さて、年老いた女性に対して称賛演説を行うことはローマ人の習慣でありが、若い女性に対してはそのような

意をもたらした。この不幸な出来事が大衆の心を捉える助けとなり、彼は優しく情に厚い人物として愛される
നാശട്ടുന്ന് പാട്ടിൽ നിന്നും പ്രവൃത്തി നിർമ്മിക്കുന്നതാണ്. ഇവിടെ സെലിക്സുകളാണ് പ്രവൃത്തിയുടെയും പ്രവൃത്തിയുടെ പിന്തുണയും പ്രവൃത്തിയുടെയും. സാമ്പത്തികരം നിലക്കുന്നതിനാണ് പ്രവൃത്തിയുടെയും പ്രവൃത്തിയുടെയും. സാമ്പത്തികരം നിലക്കുന്നതിനാണ് പ്രവൃത്തിയുടെയും പ്രവൃത്തിയുടെയും. സാമ്പത്തികരം നിലക്കുന്നതിനാണ് പ്രവൃത്തിയുടെയും പ്രവൃത്തിയുടെയും.
追悼演説であった。

前四四年三月一日、元老院の会場となったポンペイウス劇場でカエサルは殺害される(8). その後、この年のコン
スルであったM・アントニウスによってカエサルに対する追悼演説がなされた。この追悼演説については、複数の史
料が言及しているが、その描写は必ずしも一致しておらず、行われた状況や内容については確定的なことは言えな
い。同時代人であり、暗殺から追悼演説にいたる状況を見ていただろうキケロはアントニウスの追悼演説について、
以下のように語っている。

“しかし、実際に彼がフォルムで火葬され、追悼演説がなされるとlaudatioも君
アントニウスのもの、憧憬の言葉も君のもの、
てabbageの家に襲撃をしかけてきた。その後、どうなったか？彼らは大胆にも、
反対するのか、と言ってきた”(33).

“あの素晴らしい称賛laudatioも君
アントニウスのもの、憧憬の言葉も君のもの、
の家を焼やした、あの松明に、われわれは力をもって押し返したが、われわれの家への、
あるならず者の襲撃を、君が先導した”(33) (41) 内は引用者による補足。

ここにあげたアッティクス宛書簡は四月一日の日付の書簡であり、ビリッピカは○月○日作成、一
月末公刊されたものとされる。したがって、このキケロの記述はカエサル暗殺からそれほど月のたっていない時点
追悼演説のボリティクス

ものである。キケロは具体的な演説の内容については触れていない。彼の記述からわかるのは、アントニウスの演
説を契機としてローマ民衆が暗殺者に対して暴動を起こし、という点である。

では、後世の著作家たちはどのようにこの追悼演説を語っているのか。カエサルの葬儀に関わる記述は残している
史料は、ダマスカスのニコラス、クイントゥリアヌス、プルタルコス、エトニウス、アッピアヌス、カッピウス
・ディオの著作である。このうち、ニコラスとエトニウスには追悼演説についての記述がないため、検討の対
象から除外させておいた。また、ディオの記述についても、研究者たちは完全な原作としており、やはり対象から

外される。

カエサル暗殺から比較的年代の近いクインティリアヌスの記述は、追悼演説の場でカエサルの血染めの服が提示さ
れたことで、民衆たちが「狂乱」に駆り立てられたことを記すもの、キケロとい
具体的な演説の内容については触れ
ていない。

キケロとクインティリアヌスの記述からは追悼演説に由来して民衆の感情が刺激され
る。

プルタルコスはカエサル、キケロ、アントニウス、プルタルコスの評伝のなかでこの追悼演説に言及している
が、演説の状況について詳しく伝えているのは「アントニウス伝」においてである。

― カエサルの遺体が運ばれているとき、慣習に従い、アントニウスは終盤に血塗られ、剣で裂かれた故人の衣服を振
り交ぜて語り、演説の終わりに、「血塗られた人びとを血によって汚された人びと、人殺しと呼んだ。それによって人びとに激しい怒りを引き起こし、彼らは長椅

を求める。"
この記述では、アントニウスの追悼演説が聴衆の感情を刺激し、暴動へと駆り立てたことが指摘されている。キケロ、クインティリアヌスと記述との共通点を見いだせるが、より明確に追悼演説の状況が描写されている。

アッピニアヌスの記述は、アントニウスによるカエサル追悼演説についての著作品が述べていない具体的な内容については言及しているが、しかししながら、史料の記述からアントニウスの追悼演説によって民衆の暴動が引き起こされ、カエサルの暗殺者たちは好ましくない状況が生じたことは確認できる。この演説はカエサル暗殺後に行われたものであり、前宮殿のガラックスやマリウス、キンナの事例のように、国家によって忘却を企図され、民衆たちのなかでのみ生き残った記憶の召還の事例ではないが、反カエサル派の政治家たちアントニウスという異なる記憶を残し得すことを試みている。実際、カエサル暗殺後、暗殺者たちはカエサルの専制からの解放者という自己イメージを獲得することを試みている。

それに、自由を象徴する帽子であるピレウスと二つの短剣が描かれ、カエサル暗
追悼演説のポリティクス ー 154 ー

殺の日付である三月一五日が刻印されていた。このように暗殺直後においては、未主としてのカエサル像が形成され、その結果、カエサルの記憶が忘却されるという可能性は残されていた。その可能性がついに契機こそアントニウスによる追悼演説であった。アントニウスは追悼演説によってカエサルの記憶をとどめることを試み、それが行われた民衆はアントニウスの提示したカエサルの記憶を共有し、記憶の媒介者としての役割を果たしたのである。

この後、カエサルは、彼の後継者であるオクタヴィアヌス（＝アウグストゥス）により、神格化されることになった。追悼演説には、客観的な過去ではなく、両者を内包した過去であったという。

難さられた「客観的な過去」ではなく、両者を内包した過去であったという。

その過去の媒介者としての役割を果たしたのが、ローマ人の存在である。彼らは、前四四年のカエサル自身に対する追悼演説が示しているように、どのような記憶が維持されているのかを選択する一端を担う存在であった。このような故人・演説者、聴衆の関係性を

講義

loeりに
Polyb., 6. 53. 1


Cic., Leg., 2. 61.
Cic., Mil., 33.
Suet., Iul., 6. 1;
Plut., Caes., 5. 2.
Cic., De or., 2. 44.
Cic., Brut., 62.
Cic., Q. fr., 3. 6.
Cic., De sen., 12.

The Roman Republic (Cambridge), 83, n.84.
Cic., Brut., 16-27:
Cic., Phil., 1. 9:
Plut., Fab., 1. 9:
Flower 1996, 145-150.
Cic., Att., 13. 37. 3;
13. 48. 2:
Flower 1996, 145-150.

Constructing Literature in the Roman Republic (Cambridge), 83, n.84.